

抄物に見られる打消接続助詞「いで」

—— 柏舟宗趙講『周易抄』を中心に ——

山 中 延 之

はじめに

文明九年（一二七七）に成立した柏舟宗趙講^{はくしゆうそうちやう}、横川景三・景徐周麟聞書^{おうせんけいさん}『周易抄』^{しゆうえきしやう}（以下、『周易抄』）において、以下の異同が見られる。

①―1 改ムル世ヂヤ程ニ、下カラ火ガセメ上ラバ、上ハ改メラレデハ叶マイゾ^①

（土井本・革・九三・注・五28オ）

①―2 アラタムル世チヤホトニ下カラ火カセメ上ラハ上ハ改メラレイテハカナウマイゾ（京大國文本・五19ウ）

①―1は、『時代別国語大辞典室町時代編』（以下、『時代別』と略称）の助詞「いで」の項の【参考】に、室町時代に打消接続助詞の「で」・「いで」が「併存」していたことの例として挙げられているものである。

②この語形（「いで」…引用者注）は当代の成立とみられ、その確実な用例は抄物などに現れている。抄物でも、周易抄に「カ、ル者ニ大将ヲサセデハサテゾ」（三）「改ムル世ヂヤ程ニ、下カラ火ガセメラバ、上ハ改メラレデハ叶マイゾ」（五）などとあるように、「いで」とともに「で」も残存している。両語形の併存期間を経て、話し言葉では、東国を除き、次第に「いで」の形で統一されていった。（『時代別』「いで（助）」【参考】）

しかし、柳田（一九七四）が「清原宣賢自筆本を含む、素姓のよい、天理図書館・京大国文研究室本」と評するよ

うに、京大国文研究室本のほうが信頼すべき本文であり、①―②が『周易抄』本来の本文であったと思われる。すな

わち、京大国文本が古い形であり、土井本の「改メラレデハ」は改変された形であろう。土井本の例を抄物における

打消接続助詞「で」の用例として扱う場合には、土井本書写当時（あるいは土井本へ至る書写過程のどこか）において、当時としては文語的な表現が混入した例である、という但し書きが必要であろう。そうだとすると、②のように

土井本を根拠として「いで」とともに「で」も残存している」と両語の一般的な性格を導き出すことは難しいのではないか。

また、②の「残存している」・「統一されていった」という表現を敷衍すれば、『周易抄』の時点で「いで」が新興の語として優勢ではあったが、「で」も中古以来の語として勢力を弱めつつも存在しており、その後さらに衰退した、とすることができると思う。しかし、吉田（一九六三）によれば、十五世紀後半の桃源瑞仙から十六世紀前半の

清原宣賢（きはらのぶかた（せんけん）^②）までの幅広い年代の抄物を調査した結果、③そのいずれの資料においても「いで」が優勢であって「で」は劣勢であることを述べている。その根拠は、「いで」は用例数が多く、前接語も四段活用を中心に多様であるが、「で」は用例数が少なく、前接語も断定の助動詞「なり」を中心に限られたものであることにある。この吉田（一九六三）に従って、『周易抄』成立の段階からすでに打消接続助詞の勢力は「いで」が「で」をはるかにしのぐものであったと

見るべきではないか。

本稿は、右の二点の疑問点に以下の若干の考察を加え、『時代別』の補足を試みたいと思う。

天理・京大國文本と土井本との用例比較

『周易抄』は、文明九年（一四七七）に近江国の永源寺にて柏舟宗趙の講義を横川景三が景徐周麟とともに聴講、筆録した聞書である。

横川による聴講・聞書作成に関する跋文と柏舟が伝授を証する跋文とが現存し、成立時には各々の筆跡による二つの跋文があったものと思われる。両者の跋文を今も有する伝本を「二跋本」と呼び、諸本の中でも特に古いとされる。他に柏舟の跋文のみ有する「一跋本」、跋文をもたない「無跋本」があり、それらを総称して「原本系」と呼んでいる。その後、横川聞書に一栢現震の抄等を加えたものも現れ、これを「編集本系」と呼ぶ。原本系・編集本系を併せ、『周易抄』には二十本以上の伝本が知られている。⁽⁴⁾

天理本・京大國文本は二跋本であり、土井本は編集本である。「天理本・京大國文本」というと相異なる由来の伝本の組合せのようであるが、もともと一具のものである。室町時代の大儒学者・清原宣賢とその息子の業賢なりかたによって書され、分担は卷一・三・四が宣賢、卷二・五・六が業賢である。さらに宣賢は業賢筆写部分にも特徴ある筆跡で修正・補記を加えている。書写時期も古く、内容も信頼が置ける。長く清原家に伝わったが、その後、卷一〜四の四巻二冊が天理大学附属天理図書館に、卷五・六の二巻一冊が京都大学文学部国語学国文学研究室に分かれて所蔵されるに至った。現所蔵者は異なるが僚卷である。一方、土井本は書写時期も室町末期に下るとされる。

鈴木（一九七二）や『時代別』が『周易抄』を扱うにあたって底本とする土井本は「編集本」に属するが、その間

題点を、柳田（一九七四）は以下のように指摘する。

中心になるのは一栢抄と横川抄とである。このうち、語学資料としての利用度からいえば、横川抄が中心になるのであり、鈴木氏の言語研究も殆どがそこに向けられている。その横川抄の部分の本文については、鈴木氏によれば、増補本のそれが後出性を示しているという。また、土井本に認められる開合の混同は、原本系の本文では殆ど正しいらしい。このような場合、従来の「常識」からすれば、底本には、原本系の本文を用いるのが普通であろう。しかも、原本系には、清原宣賢自筆本を含む、素姓のよい、天理図書館・京大國文研究室本が存するのである。

この指摘をふまえ、本稿では土井本と天理・京大本とを比較してみたいと思う。①のような比較を通じてどのようなことが浮かび上がってくるのか、②に挙げられていたもう一例の検討に移りたい。これは、土井本が誤って濁点を付した例である。

③―① カ、ル者ニ大将ヲサセデハサテゾ（土井本・復・上六・三二八才）

③―② ……大将ヲサセテハサテソ（天理本・三三三才⁵）

時代別の挙げる『周易抄』卷三の例「大将ヲサセデハサテゾ」の「デ」は、誤って濁点が付されたものである。なぜなら、ここが打消接続の「デ」だと、原典と齟齬をきたしてしまうからである。この用例は、原典『周易』（易経）が〈戦争をしてはならない〉と述べる部分への注釈である。『周易』（復卦・上六・卦辞）には次のようにある。

④（原文）用行師、終有大敗（訓読）用て師を行る、終に大敗することあり。

（現代語訳）これでもって軍隊を動かせば、最後に大敗するのである⁶。

いくさをするに負ける、つまり、戦争をしてはいけない、というのが原文の意味であり、注釈もその意味であるはず

抄物に見られる打消接続助詞「いで」

である。しかし、『時代別』のいう「大将ヲサセデハサテゾ」（「大将をさせないのはよくない」では大将を務めさせようとする表現になってしまう。つまり戦争をけしかけていることとなり、原典に反する。ここの「テ」は順接の接続助詞であり、「大将ヲサセテハサテゾ」つまり、大将をさせてはよくない、の意である。^①

次いで、鈴木（一九七二）『研究篇』四七九頁以下に挙げられている打消接続助詞「で」の例六例（①―①・③―①を含む数）に検討を加えてゆくと、その半数が天理・京大國文本で「いで」となっている。①及び次の⑤・⑥である。

⑤―① 乾剛ヂヤ程ニ陥シイレラレデ不_二困窮_一ゾ（土井本・需・卦辞・一四九才）

⑤―② 乾チヤホトニヲトシモ入レラレイテ不_二困窮_一ソ（天理本・一五才）

⑥―① 四徳カアリテ天下化セウニハイヤシイモノモ徳ヲウケデハゾ（土井本・中孚・彖伝・六三五^②才）

⑥―② 四徳カアリテ天下モ化セウニハイヤシイモノモ徳ヲウケイテハソ（京大本・六五一才）

⑤・⑥は①と同じく、『周易抄』成立時には「いで」と書かれていたが、土井本では文語的な「で」の形を取っている例だと考えられよう。

残る二例は、土井本、天理・京大國文本ともに「で」を取る。

⑦―① 圍繞セデハ、ナンテ固ウセウゾ（土井本・遯・六二・注・四一六才）

⑦―② イニウセテハナンテカタセウソ（天理本・四八ウ）

⑦―③ イニウセテハナンテカタウセウソ（両足院本・四一四才）

⑦は、天理・京大國文本とともに二跋本に属する両足院本でも「で」となっている。吉田（一九六三）によれば、抄物において「で」が前接する語にサ変の「す」が散見される。「せで」は、文語的な「で」を用いながらも、抄物では比較的实现しやすかった形式なのであるうと思われる。

最後の例は、解釈を容易にするため、天理本からやや長めに引用する。

⑧―1 寒暑ニモ侵サレデ病ゾ（土井本・无妄・九五・三二ウ）⁹

⑧―2 凡病ハ食事ニ毒ヲクウカ、寒熱ニ侵レテ病ノアルハ道理テ病ゾ。サウハナケレトモナントヤラウシテ病ハ无妄ノ病ゾ。寒暑ニモ侵サレテ病ゾ（天理本・三二ウ）

⑧―3 寒暑ニモ侵サレイデ病ゾ（両足院本・三二ウ）

つまり、食事や気候に原因のあるふつうの病気と異なり、「寒暑ニ侵サレ」ず、かかるのが「无妄」^{ぶもう}の病である、というのである。『周易抄』本文としては天理本も打消接続を含む「侵サレデ」と見なければつじつまが合わない。

両足院本の「イデ」が古い形を残すのかもしれない。

結論と今後の展望

以上、吉田（一九六三）と柳田（一九九八）とを組み合わせ、『時代別』の補足を試みた。『時代別』が【参考】に挙げた『周易抄』に見られる打消接続の「で」の二例は、『周易抄』原初の形と見なすことは困難である。特に巻三の例は濁点に関する誤写であり、打消接続助詞と解釈する余地はない。吉田（一九六三）の調査結果を併せ考えると、抄物における打消接続助詞は「で」よりも「いで」のほうが優勢である。¹⁰

ここから、抄物における打消接続助詞は「いで」が「で」よりも基本的なものである、と行うことができるであろう。これは、「いで」を「抄物共通語」と考える大橋（一九八九）の立場と関わってくる。「イデ」が上方特有の助詞であると同時に「東国系の抄物にも記録されているという事実は、講義の場においては、地域性を問わず、定着しつつあったものと考えられる」という。¹¹

抄物に見られる打消接続助詞「いで」

鈴木（一九七二）には「抄物における「デ」と「イデ」との対比は、なお一層の考究が必要ではないかと思われる。」（四八一頁）と述べられている。今もなおその状態が続いているといつてよいだろう。

【参考文献】

- 大橋敦夫（一九八九）「抄物の語法―抄物共通語の存在について」『上智大学国文学論集』二二二 *森岡健二編著（一九九一）『近代語の成立―文体編―』（明治書院）に収録
- 鈴木 博（一九七二）『周易抄の国語学的研究 影印篇』・『同 研究篇』清文堂
- 本田 濟（一九六六）『新訂中国古典選第1巻 易』朝日新聞社
- 室町時代語辞典編修委員会編（一九八五）『時代別国語大辞典室町時代編 第一巻』三省堂
- 柳田征司（一九七四）「書評 鈴木博著「周易抄の国語学的研究」」『国文学攷』六三 *柳田（一九九八）「柏舟宗趙 講横川景三聞書系『周易抄』について」『室町時代語資料としての抄物の研究』第二章第四節、武蔵野書院 に改稿して収録
- （一九八〇）「抄物」国語学会編『国語学大辞典』東京堂 *柳田（一九九八）「概観」『室町時代語資料としての抄物の研究』序章 第一節、武蔵野書院 に改稿して収録
- （一九八三）「抄物目録稿（原典漢籍経史子類の部）」『訓点語と訓点資料』七〇
- 吉田金彦（一九六三）「いで」の成立と用法『国語国文』三二―五

注

(1) 引用に際し、土井忠生氏旧蔵本は一般的な「土井本」の呼称を用い、鈴木(一九七二)より引用した。天理大学附属天理図書館本(請求番号…一二二・一〇一七)・京都大学文学部国語学国文学研究室蔵本(請求番号…国文学/Tg/42)は「天理本」・「京大国文本」の呼称を用い、実地調査時に入手した写真に基づき引用した。

なお、濁点は底本のままとする。また、①②等の○数字は引用者による。『周易』の卦名は諸本共通なので、土井本にのみ示す。句読点は、長文の引用を除き、省略した。

(2) 柳田(一九八〇)に「前期抄物」(十五世紀後半の抄物群)と「後期抄物」(十六世紀前半のそれ)という区分が示されている。
(3) 吉田(一九六三)は、以下の六種の抄物における打消接続助詞「いで」の前接語を調査している。(A)(B)は桃源瑞仙らによる前期抄物、(C)(D)は清原宣賢らによる後期抄物の代表的著作である。所蔵者等が明記されていないので詳細は不明だが、(E)も宣賢抄だと思われる。(F)は不明。

(A) 京都大学附属図書館清家文庫蔵『漢書抄』六冊、(B) 同右文庫蔵『史記抄』二十冊、(C) 同館蔵『毛詩抄』十冊、
(D) 京都大学附属図書館清家文庫蔵『魯論抄』五冊、(E) 無刊記活字本『蒙求抄』、(F) 万治三年刊本『勅修百丈清規抄』十五卷八冊

吉田(一九六三)はこの両期にわたる資料群を調査しており、抄物全体の「いで」の概略が明らかになったと言ってよい。

(4) 鈴木(一九七二)・柳田(一九七四)・柳田(一九八三)による。

(5) ただし、天理・京大本は濁音節に義務的に濁点を付すわけではないので、濁点がないことが清音の証拠にはならない。

(6) 原文・訓読・現代語訳は、本田(一九六六)による。

(7) 当該例は、鈴木博(一九七二)『影印篇』(二五三頁)と、それを引用した『同研究篇』(四七九頁)に一致する。しかし、土井本は、誤って濁点が付された箇所(鈴木(一九七二)『研究篇』四八・四九頁)や『周易抄』成立以降の言語が混入した部分(鈴木(一九七二)『研究篇』三八頁く・六八頁く)のあることが指摘されており、その利用には慎重な検討が必要である。

抄物に見られる打消接続助詞「いで」

(8) 鈴木（一九七二）では土井本の用例に注記して「*両足院本ウケイテハソ（両足院本巻六・32ウ）」を挙げる。

(9) 鈴木（一九七二）『研究篇』は挙例に続けて「*両足院本「侵サレイデ」と注記している。

(10) 『周易抄』天理・京大国文本の全体の「いで」「で」を調査すると、吉田（一九六三）と同様の結果が得られた。「いで」の延べ語数は合計¹⁴⁴例で、巻一〜六の巻ごとの用例数は、16・24・14・19・35・36例であった。一方、「で」のそれは合計10例で、内訳を同様に示すと4・4・1・1・0・0例であった。また、「いで」の前接語は四段動詞を中心に上一段・下二段・サ変と多様であるのに対し、「で」の前接語は助動詞ナリと⑦-2、⑧-2くらいである。

(11) 大橋（一九八九）は抄物を京都系・東国系に分け、「いで」が双方に見られることから、「いで」を抄物共通語と位置づけている。ただし、吉田（一九六三）は東国抄物の「いで」は少し違うという。この用法のずれについても考察の余地があるだろう。

〔付記〕本稿はJSPS科研費18K12403・18H00643・19K00356の助成を受けたものです。

貴重な古典籍の調査に際し、建仁寺両足院の伊藤東文師、天理大学附属天理図書館、京都大学文学研究科図書館にお世話になりました。深く御礼申し上げます。

（本学講師）